

第3節 まとめ

75次調査区からは土坑、井戸、溝、竪穴建物などの遺構とともに多くの遺物が出土した。時期的には14世紀代と16世紀代の遺物が確認された。出土遺構の位置づけ等については、隣接する41次、69次、77次調査区の成果と併せて報告されているので、そちらを参照願いたい。

ここでは、本調査区で確認された竪穴建物について若干の考察を行なう。

1 中世の竪穴建物について —大分県下の例から—

1

竪穴建物とは、竪穴という半地下構造の施設を伴う建物である。全国各地において広く確認されており、その構造や性格についての議論が行なわれている（註1）。

大分県下の一般集落においては、9世紀以降、掘立柱建物が一般的となるが、中世にいたり竪穴建物が散見されるようになる。しかし、竪穴建物は掘立柱建物に比べその数は圧倒的に少ない。そのため、竪穴建物の機能と集落内における位置づけが注目される場所である。本稿では、大分県下における竪穴建物の集成を行い、それらから竪穴建物の構造、編年、系譜、性格などの検討を行なう。

2

中世における大分県下の竪穴建物は、管見によれば16遺跡25例が知られている（第294図）。ここでは、各遺跡の竪穴建物の概要を述べるとともに、若干の類似遺構についても紹介する。

1 古庄屋遺跡（第295、296図）

古庄屋遺跡（註2）は中津市本耶馬溪町に所在しており、山国川の支流である跡田川と西谷川が合流する地点に位置する。背後には丘陵があり、川と丘陵に囲まれた要害の地となっている。遺跡の主体となる時期は12世紀末から14世紀中～後葉で、溝、川、丘陵で囲まれた一辺1町クラスの規模に匹敵する居館である。

竪穴建物は4基が確認されている。これらは掘立柱建物群の東南に位置し、ほぼ同位置で重複しながら連続して構築されており、居館内での空間利用が継続的に踏襲されていることが分かる。これらの平面形は方形であるが、切り合いの関係から、規模の明らかにできるものは竪穴1と竪穴3である。

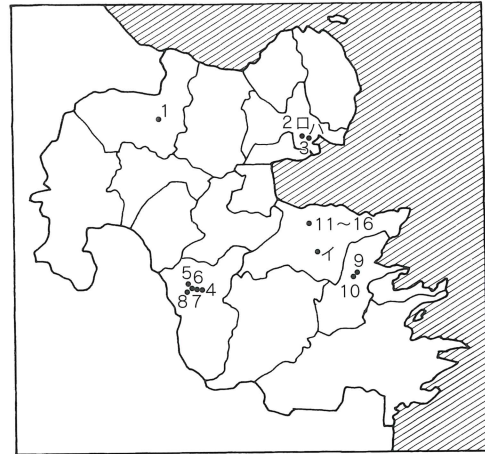
① 竪穴1は長辺8m、短辺7mの方形を呈し、深さは0.2mである。床面は平坦で、柱穴が約10本みられる。しかし、柱穴は不規則な配置で、本竪穴建物に伴わないことも考えられる。時期は13世紀後葉である。

③ 竪穴3は長辺6.5m、短辺5mの方形で、深さは0.2mである。床面は平坦で柱穴が多数みられるが、配置に規格性が認められず、本竪穴建物に伴うか定かではない。壁に沿い幅0.2～0.4m、深さ0.1mの溝が巡る。時期は13世紀後葉である。

2 八坂中遺跡（第296図）

八坂中遺跡（註3）は別府湾に面する国東半島南部の杵築市に所在する。下流域で蛇行する八坂川の右岸に位置し、若干の断絶があるものの遺跡は11世紀後半～16世紀までの間存続している。八坂川下流域は宇佐宮弥勒寺領荘園である八坂荘となっており、遺跡は荘園の表玄関的役割を担う中核的な拠点遺跡であったと考えられる。

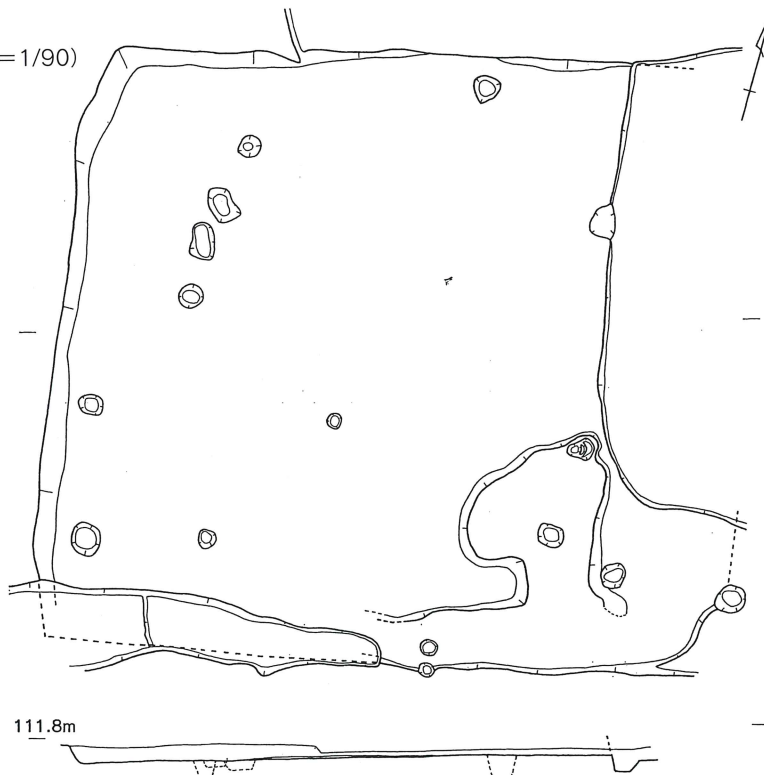
⑤ 竪穴2は、13世紀後半～14世紀初のものである。周辺にみられる同時期の溝や掘立柱建物と方向を同じにすることから密接な関係がうかがえる。平面形は長方形を呈し、長辺3.8m、短辺2.8



遺跡名	所在地	遺構名	分類	竪穴規模(m)				時期	備考
				長辺	短辺	深さ	面積		
1 古庄屋遺跡	中津市本耶馬溪町	① 竪穴1	I	8.0	7.0	—	56.0	13世紀後	
		② 竪穴2	I	—	—	—	—	13世紀後	
		③ 竪穴3	I	6.5	5.0	0.2	32.5	13世紀後	周溝あり
		④ 竪穴4	I	—	—	—	—	13世紀後	
2 八坂中遺跡	杵築市八坂	⑤ 竪穴2	I	3.8	2.8~3.2	0.2	12.2	13世紀後~14世紀初	入口施設あり
		⑥ 竪穴1	II 1A	3.2~3.6 下端2.6	2.8~3.2 下端2.0	0.9~1.0	11.5 床面積3.2	16世紀	
3 八坂本庄遺跡	杵築市八坂	⑦ 竪穴1	I	3.3	3.0	0.05~0.1	9.9	不明	
4 上城遺跡	竹田市久住町	⑧ 土坑45	II 2B	3.2	3.1	0.5	9.9	13~14世紀	
5 小鷺原遺跡	竹田市久住町	⑨ 竪穴	II 3B	3.4	2.4	0.05~0.2	8.2	16世紀	
6 中原遺跡	竹田市久住町	⑩ 竪穴1	II 3B	3.5	2.7~3.0	0.2	10.5	15~16世紀	
		⑪ 竪穴2	II 3B	2.6~2.75	2.4~2.5	0.1~0.2	6.9	15~16世紀	
		⑫ 竪穴3	II 3A	3.1~3.4	2.8~3.0	0.4~0.6	10.2	15~16世紀	
		⑬ 中世遺構1	II 2A	2.5	2.3	0.3	5.8	15~16世紀	入口施設あり
7 都野原田遺跡	竹田市久住町	⑭ 中世遺構2	I	3.2~3.6	2.2~2.7	0.9	9.7	15~16世紀	
8 上屋敷遺跡	竹田市久住町	⑮ 7号竪穴	II 3A	3.5	2.6	0.4	9.1	16世紀	
9 野村台遺跡	臼杵市	⑯ II区4号土坑	I	2.4	2.0	1.4	4.8	15~16世紀?	周溝あり
10 清太郎遺跡	臼杵市	⑰ 1号竪穴	II 2A	1.35	1.4	0.4	2.7	不明	
11 大友9次	大分市	⑱ SK021	I	2.8	2.3	0.25	6.4	16世紀後	床面に溝
12 大友13次	大分市	⑲ SB388	I	3.8	2.5	0.4	9.5	16世紀?	
13 大友18次西	大分市	⑳ SB389	II 3A	3.8	2.5	0.2	9.5	16世紀?	
14 大友35次	大分市	㉑ SB017	II 3A	4.6以上	3.2	0.45	14.72以上	16世紀後~末	
15 大友75次	大分市	㉒ SK30	II 3A	3.8	2.25~2.5	0.3	9.8	16世紀	
16 大友41次	大分市	㉓ SB628	II 3B	3.4~3.9	2.8~3.0	0.1	11.7	16世紀前	
		㉔ SB825	II 3B	—	—	—	—	16世紀?	竪穴部削平
		㉕ SK242	I	2.9	2.3	0.5~0.6	6.7	16世紀	四周が石積み
17 利光遺跡久保地区	大分市上戸次	イ 土坑1		2.26	1.7	0.4	3.8	14世紀中葉	石積みと石敷き
				石積内法1.9	石積内法1.25	—	2.4	—	—
				2.3	1.8	0.75~0.8	4.1	14世紀	石積みと石敷き
				石積内法1.45	石積内法0.8	—	1.2	—	—
八坂中遺跡	杵築市八坂	ロ 土坑195		2.2	1.55	0.4	3.4	14世紀前半	石積みと石敷き
				石積内法1.9	石積内法1.25	—	1.6	—	—

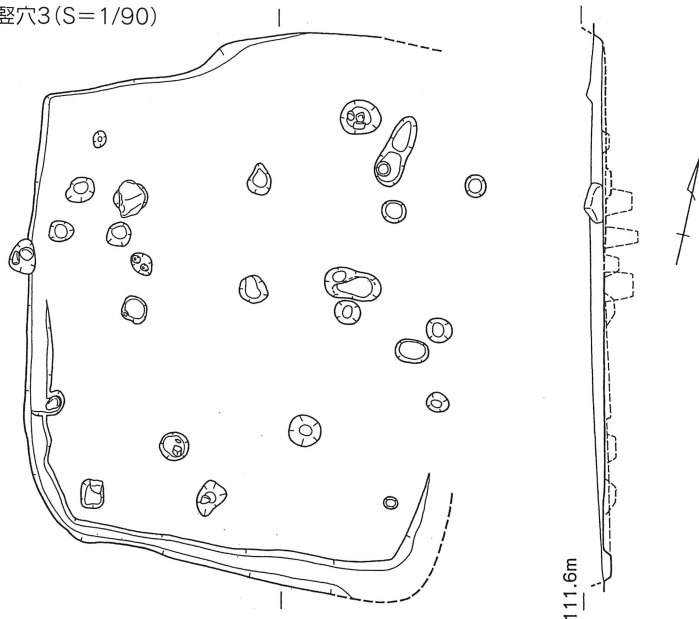
第294図 大分県における竪穴建物一覧

- 1 古庄屋遺跡
① 竪穴1 (S=1/90)



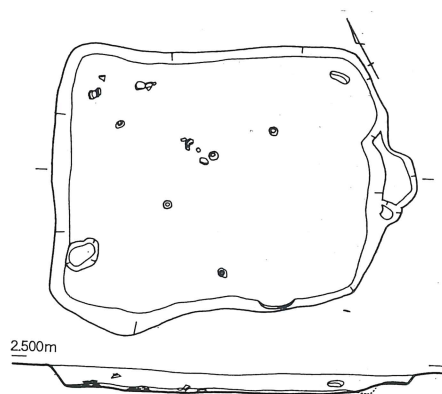
第295図 大分県下の竪穴建物(1)

③ 竪穴3 (S=1/90)

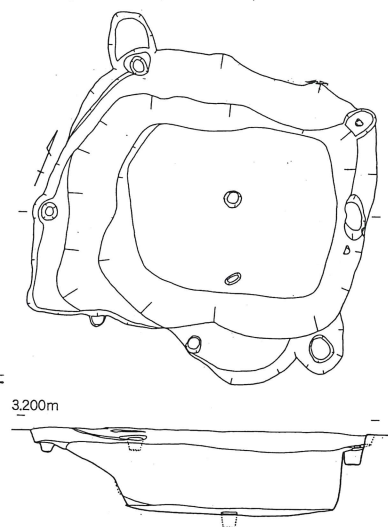


2 八坂中遺跡

⑤ 竪穴2 (S=1/90)

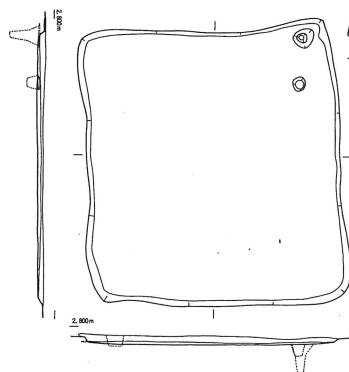


⑥ 竪穴1 (S=1/90)



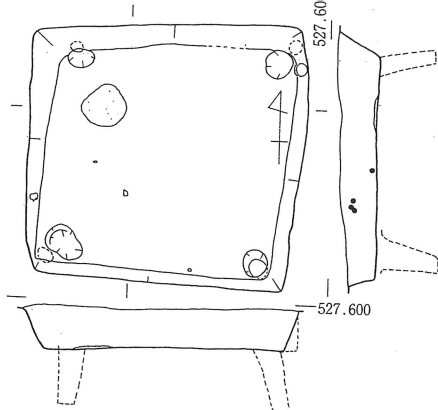
3 八坂本庄遺跡

⑦ 竪穴1 (S=1/90)



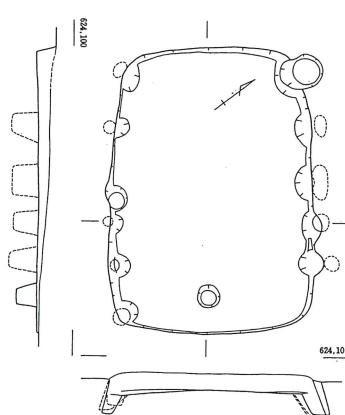
4 上城遺跡

⑧ 土坑45 (S=1/90)



5 小城原遺跡

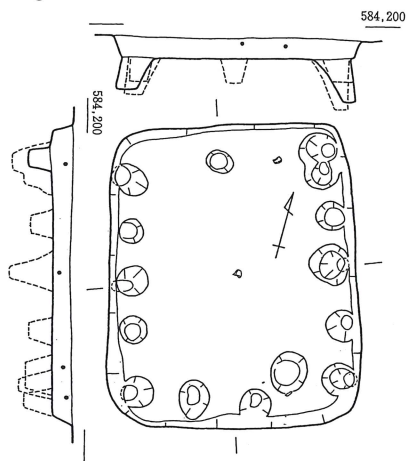
⑨ 竪穴1 (S=1/90)



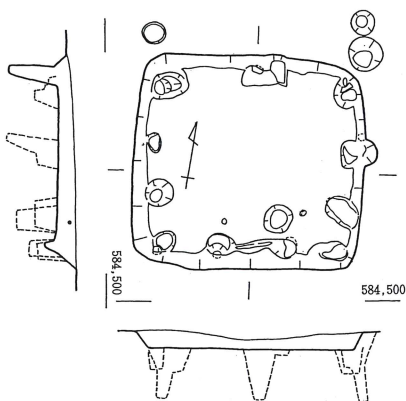
第296図 大分県下の竪穴建物(2)

6 中原遺跡

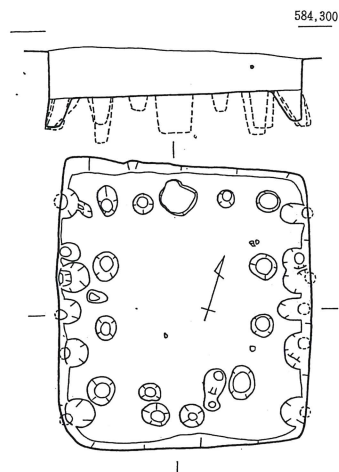
⑩ 竪穴1 (S=1/90)



⑪ 竪穴2 (S=1/90)

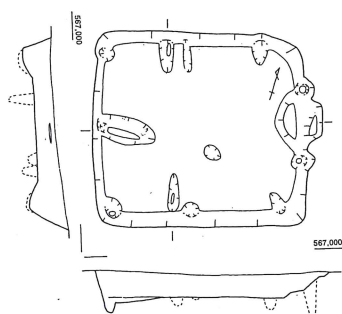


⑫ 竪穴3 (S=1/90)

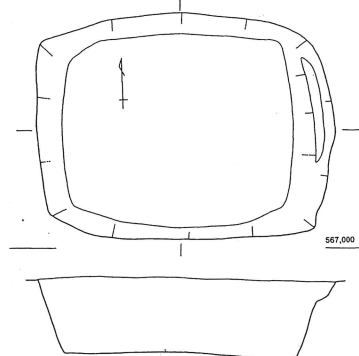


7 都野原田遺跡

⑬ 中世遺構1 (S=1/90)

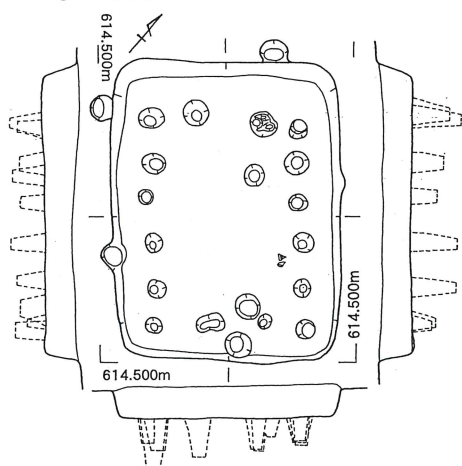


⑭ 中世遺構2 (S=1/90)



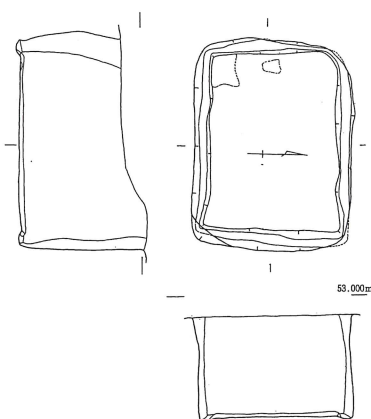
8 上屋敷遺跡

⑮ 7号竪穴 (S=1/90)



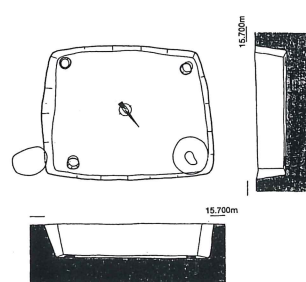
9 野村台遺跡

⑯ II区4号土坑 (S=1/90)



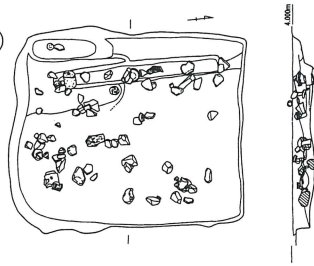
10 清太郎遺跡

⑰ 1号竪穴 (S=1/90)

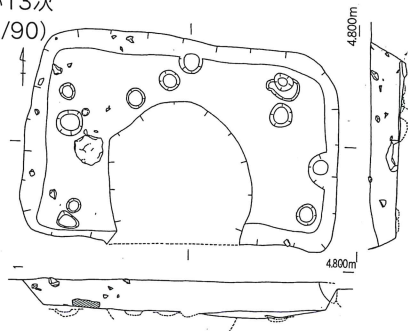


第297図 大分県下の竪穴建物(3)

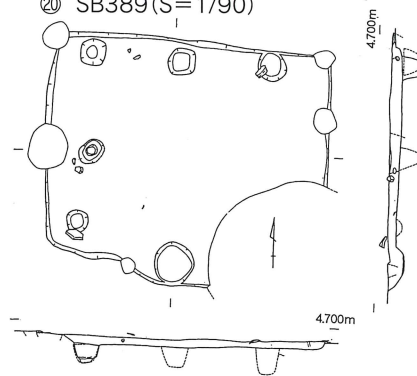
- 11 中世大友府内跡9次
⑱ SK021 (S=1/90)



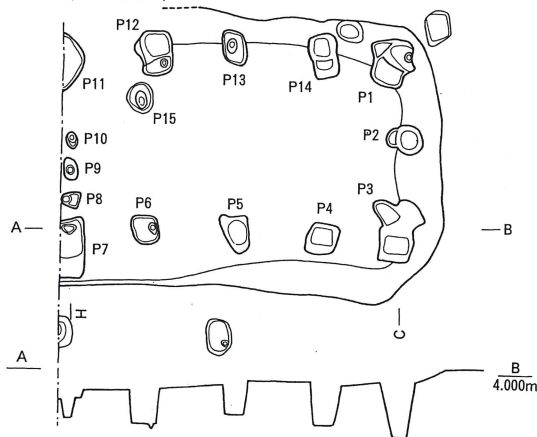
- 12 中世大友府内跡13次
⑲ SB388 (S=1/90)



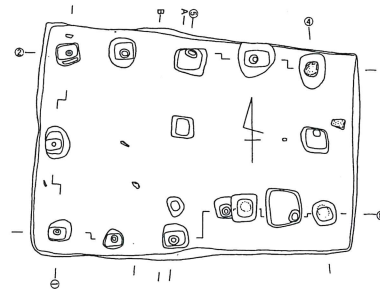
- ⑳ SB389 (S=1/90)



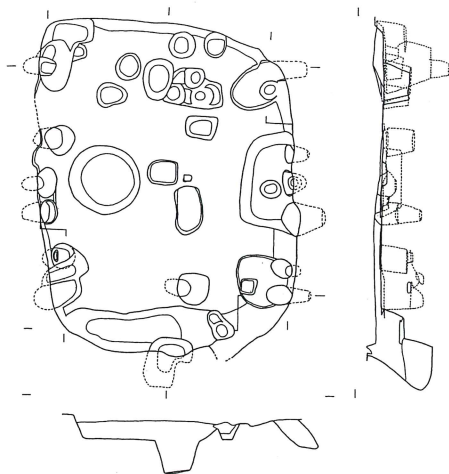
- 13 中世大友府内跡18次西
㉑ SB017 (S=1/90)



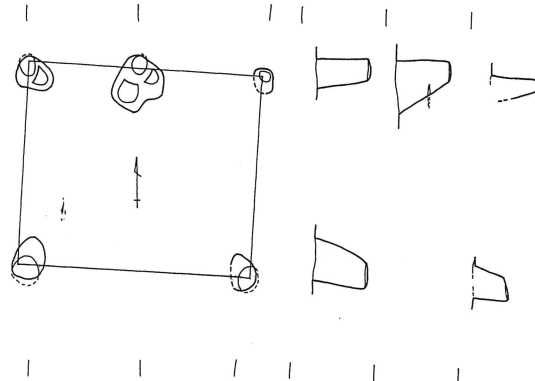
- 14 中世大友府内跡55次
㉒ SK80 (S=1/90)



- 15 中世大友府内跡75次
㉓ SB628 (S=1/90)



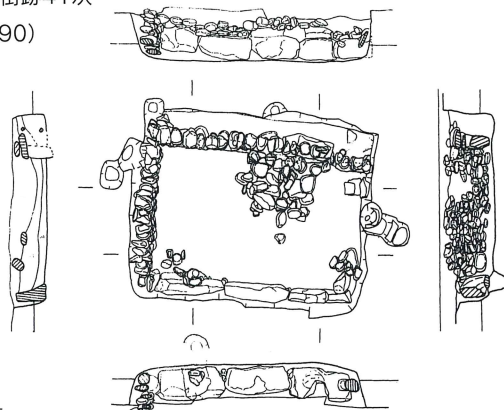
- ㉔ SB825 (S=1/90)



第298図 大分県下の竪穴建物(4)

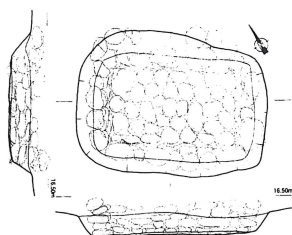
16 中世大友府内街跡41次

②SK242(S=1/90)

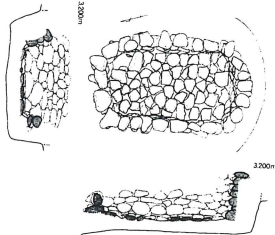


17 その他の遺構

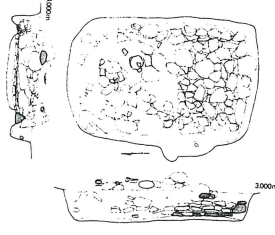
イ 利光遺跡久保地区土坑1(S=1/90)



ロ 八坂中遺跡土坑195(S=1/90)



ハ 八坂中遺跡土坑196(S=1/90)



第299図 大分県下の堅穴建物(5)

～3.2mを測る。深さは0.2mで、床面は平坦である。床面には浅い柱穴が少数みられるが、本堅穴建物に伴わないと思われる。東側の短辺中央が凸字状に突出し階段状になっていることから、出入口の施設であった可能性が考えられる。

⑥ 堅穴1は16世紀の所産である。居館3の北側溝に沿うようにみられる道路状の空間をはさみ、方位を居館と同じくしてみられる。平面形は長方形で、堅穴の下端で長辺2.6m、短辺2.0mを測る。深さは0.9～1.0mで床面は平坦である。柱穴は床面中央の1本に加え、堅穴掘り込み部の肩にみら

れる。掘り込み部にみられる柱穴は、堅穴の四隅に対応する位置と一部の辺中央に配置される。

3 八坂本庄遺跡(第296図)

八坂本庄遺跡(註4)は、先に紹介した八坂中遺跡のやや下流の八坂川左岸に位置する。遺跡は11世紀末～12世紀後半、14世紀前半、16世紀の遺構が確認されている。11世紀末～12世紀後半の集落は、条里水田の中に突然出現する。大型の掘立柱建物に加え、畿内産瓦器や吉備系土師器碗などもみられることから、川を利用した水上交通と直結した遺跡であると考えられる。12世紀後半以降は再び水田化され、14世紀、16世紀は散発的で小規模な集落がみられる。

⑦ 堅穴1は方形を呈するもので、3.3×3.0mの規模を有する。深さは0.05～0.1mである。床面は平坦で、東北隅に柱穴がみられるが、本堅穴建物に伴うものか不明である。出土遺物がないため時期は不明であるが、遺構の方位などからみて、本遺跡の主体である11世紀末～12世紀後半に比定される可能性もある。

4 上城遺跡(第296図)

上城遺跡(註5)は竹田市久住町に所在する。時期的には13世紀～14世紀後半に位置づけられるもので、75×50mの溝に囲まれた領主クラス以上の居館であると考えられている。

⑧ 土坑45は、長辺3.2m、短辺3.1mの方形を呈する。深さは0.5mで床面は平坦である。床面の四隅に柱穴が配されている。柱穴は外方向に斜めに掘られており、柱を立てると中心に4本が集

まる構造を呈する。居館を画する溝や掘立柱建物と同方位を呈することから、居館に伴うものであると思われる。

5 小城原遺跡（第296図）

小城原遺跡（註6）は竹田市久住町に所在する。15、16世紀に位置づけられるもので、北部地区、南部地区の2グループに分かれて遺構がみられる。北部地区では長辺25.5m、短辺15mの長方形区画溝などがあり、一定レベル以上の屋敷であった可能性が考えられる。

⑨ 堅穴は長方形を呈し、長辺3.4m、短辺2.4m、深さ0.2～0.05mを測る。床面は平坦であり、両長辺の壁際と南側中央部の短辺寄りに柱穴がみられる。両長辺の柱穴は南側が6本、北側が5本であるが、いずれも外方向に斜めに掘られている。本堅穴遺構は南部地区に位置し、概ね掘立柱建物と同方位を示す。16世紀代のものと考えられている。

6 中原遺跡（第297図）

中原遺跡（註7）は竹田市久住町に位置する。堅穴建物3基のほか土壌墓や多数の柱穴が確認されている。遺跡は、15、16世紀代に位置づけられる。

⑩ 堅穴1は長辺3.5m、短辺2.7～3.0mを測る長方形を呈する。深さは0.2mで、床面は平坦である。両長辺の壁際に各々5本ずつの柱穴が対をなし、加えて両短辺にも各々1本、3本を配する。両長辺に配された柱穴は外方向に斜めに掘られている。遺構内からは15、16世紀の土器のほかに、鉄滓が出土している。

⑪ 堅穴2は長辺2.6～2.75m、短辺2.4～2.5mの方形にちかい長方形を呈する。深さは0.1～0.2mで、床面は平坦である。柱穴は四隅に加え、北辺に1本、他の3辺に2本柱穴が配されている。柱穴はいずれも外方向に斜めに掘り込まれている。15、16世紀代に位置づけられる。

⑫ 堅穴3は堅穴2の北側1.5mに平行して構築されている。長辺3.1～3.4m、短辺2.8～3.0mの長方形を呈するもので、深さ0.4～0.6mを測る。床面は平坦で、両長辺の壁際に各々6本ずつの柱穴が外方向に斜めに掘られている。加えて、壁から少し内側に入った位置に、四周に沿うように垂直に掘られた柱穴が配される。15世紀代に位置づけられる土器と鉄滓が出土している。

7 都野原田遺跡（第297図）

都野原田遺跡（註8）は竹田市久住町に所在する。B区東側において、堅穴建物と柱穴群が確認された。比較的小規模な遺跡で、15、16世紀代に比定される。

⑬ 中世遺構1は長辺2.5m、短辺2.3mの方形にちかい長方形を呈する。深さは0.3mである。西側辺中央部に階段状の施設があり、その両脇には一対の柱穴が伴う。出入口の施設であろう。床面は平坦で、四隅に浅い柱穴がみられる。また、壁から中央に向かい浅い溝状の掘り込みが施される。内部の区画等に係わるものであろう。遺物の出土がなく時期は不明であるが、15、16世紀代に比定される可能性が高い。

⑭ 中世堅穴2は長辺3.2～3.6m、短辺2.2～2.7mの長方形を呈し、深さ0.9mを測る。東側短辺にわずかな段がみられるが、出入口の施設等に伴うものか不明である。床面は平坦で、柱穴はみられない。遺構内からの出土遺物は皆無であるが、中世遺構1と同様な時期であろう。

8 上屋敷遺跡（第297図）

上屋敷遺跡（註9）は竹田市久住町に所在する。掘立柱建物跡、溝などとともに堅穴建物が確認された。堅穴建物は、掘立柱建物に隣接し方位を同じくして構築されている。遺跡全体として出土遺物は少ないが、16世紀前後が中心となるようである。

⑮ 7号堅穴は長方形プランを呈し、長辺3.5m、短辺2.6mを測る。深さは0.4mを測り、床面は平坦である。床面には柱穴が16本みられ、壁から0.3～0.4m入った位置で、壁に沿うように長方形に配される。柱穴は垂直に掘り込まれている。時期を決定できる出土遺物はないが、16世紀前後

に比定されよう。

9 野村台遺跡（第297図）

野村台遺跡（註10）は白杵市に所在する。飛車丸地区Ⅱ区から、土坑などとともに竪穴建物が確認されている。

⑩ 4号土坑は、長辺2.4m、短辺2.0mの長方形を呈するもので、深さ1.4mを測る。床面は平坦で、壁に沿い幅0.1mの溝が巡る。柱穴は認められない。15、16世紀代のものか。

10 清太郎遺跡（第297図）

清太郎遺跡（註11）は白杵市に所在する。遺跡からは柱穴、土坑などとともに、竪穴建物が確認されている。遺跡は12、13世紀が主体で、16世紀代の遺物も出土している。

⑪ 1号竪穴は長方形を呈し、長辺1.95m、短辺1.4mを測る。深さは0.4mで、床面は平坦である。四隅に柱穴が配されており、柱穴は垂直に掘られている。出土遺物が皆無なため、時期は不明であるが、16世紀代位置づけられる可能性が考えられる。

11 中世大友府内町跡9次（第298図）

中世大友府内町跡は大分市の大分川下流左岸に位置する。大友府内町は大友館、万寿寺、御蔵場等を中心に、南北方向の4本の街路、東西方向の小路により整然と区画されている。調査により、14～16世紀にかけての遺構・遺物が確認されている。

中世大友府内町跡9次調査区（註12）は、第2南北街路を挟んで大友館の東側にあたる。街路に面し町屋がみられるが、竪穴建物は町屋を構成する柱穴群に隣接するように確認された。

⑫ SK021は長方形を呈し、長辺2.8m、短辺2.3mを測る。深さは0.25mで、床面は緩やかな起伏がみられる。西側長辺の壁は段がみられ、壁際には壁に沿うように浅い溝が掘られる。柱穴は全く確認されていない。町屋を構成する柱穴列と方位をほぼ同じくすることから、町屋との強い関連がうかがえる。時期は16世紀後葉である。

12 中世大友府内町跡13次（第298図）

中世大友府内町跡13次調査区（註13）は、第2南北街路を挟み、大友館の東南側に位置する。南側には万寿寺の寺域が広がる。9次調査区同様、街路に面し町屋がみられる。

⑬ SB388は長方形を呈し、長辺3.8m、短辺2.5mを測る。深さは0.4mで、床面は平坦である。床面からは浅い柱穴と凝灰岩製の板石が検出されている。中央部が他遺構により破壊されているが、残存する部分において、柱穴配置に規格性はみられない。町屋の柱穴列と方位を同じくしていることから、16世紀代に比定されよう。

⑭ SB389は長方形プランを呈するもので、長辺3.8m、短辺2.5mを測る。深さは0.2mで、床面は平坦である。一部が他遺構により破壊されているが、長辺の壁に沿い3本、短辺の一方の中央に1本各々柱穴を配する形態であったことがうかがえる。柱穴は垂直に掘りこまれる。遺物が乏しく時期の決め手に欠くが、16世紀代のものであろう。

13 中世大友府内町跡18次西（第298図）

中世大友府内町跡18次調査区西（註14）は大友館東北部の東側に位置し、大友館に直接隣接している。

⑮ SB017は一部が調査区外に及ぶため全形が不明だが、隅丸基調の長方形を呈する。長辺4.6m以上、短辺3.2m、深さ0.45mを測る。床面には、やや傾斜がみられる。長辺、短辺の壁に沿い柱穴が配されており、長辺部分は現状で5本が確認されている。柱穴はいずれも垂直に掘りこまれる。時期は16世紀後葉～末に比定される。

14 中世大友府内町跡55次（第298図）

中世大友府内町跡55次調査区（註15）は御蔵場の南側に位置する。

② SK80は長方形を呈する。長辺3.8m、短辺2.25～2.9m、深さ0.3mを測る。床面は平坦である。各辺の壁に沿うように柱穴が配されているが、南側長辺については、柱穴配置が直線ではなく折れ曲がる。柱穴は垂直に掘りこまれる。時期は16世紀中～後葉に比定される。

15 中世大友府内町跡75次（第298図）

中世大友府内町跡75次調査区（註16）は55次調査区の南側に位置する。

③ SB628は隅丸長方形ないしは小判形を呈する。長辺3.4～3.9m、短辺2.8～3.0m、深さ0.1mを測る。両長辺に沿い柱穴が6本づつ配され、いずれも外方向に向け斜めに掘りこまれている。16世紀前葉に比定される。

④ SB825は堅穴が削平されているが、柱穴配置から長方形プランを呈していたものと思われる。柱穴は両長辺に沿いみられ、いずれも外方向に向け斜めに掘りこまれている。出土遺物がなく時期は不明であるが、16世紀代に比定される可能性が高い。

16 中世大友府内町跡41次（第299図）

中世大友府内町跡41次調査区（註17）は75次調査区の西側に位置する。

⑤ SK242は長方形を呈するもので、長辺2.9m、短辺2.3m、深さ0.5～0.6mを測る。堅穴の壁に沿い石積みがなされており、両長辺の基底部には30～40×45～80cmの大型の石材を据えている。その上部及び両短辺は10～20cmの石材が積まれている。石積み内側の規模は、長辺2.2m、短辺1.6mである。床面は平坦で、南側長辺の南西隅近くの基底部石材横に柱穴が1本みられる。このほか、南側長辺東端の基底部石材は中央部が上面から20cmほど抉られており、柱を据えた可能性が考えられる。16世紀代のものである。

17 その他の遺構について（第299図）

以下に紹介するイ～ハは、堅穴という地下構造を利用した施設という点で、先に紹介した堅穴建物と共通する。しかし、堅穴建物と比べると規模がかなり小さい。また、イ～ハにみられる石積みや石敷きについても、堅穴建物では一部（中世大友府内町跡41次⑤）において石積みが見られるのみで、石敷きについては認められない。これらの遺構が堅穴建物として考えられるかは、後段で改めて検討する。

イ 利光遺跡久保地区土坑1

堅穴は長辺2.26m、短辺1.7m、深さ0.4mの長方形を呈し、堅穴内の四周は河原石による石積みがなされている。また、床面には扁平な河原石が敷き詰められている。壁面、床面ともに石の間には粘土による目張りが行なわれている。石積みの内法で、長辺1.9m、短辺1.25m、面積2.4㎡である。14世紀中葉のものである（註18）。

ロ 八坂中遺跡土坑195

堅穴の全容は不明だが、楕円形気味の長方形を呈するものと思われる。堅穴は長さ2.3m、幅1.8m、深さ0.75～0.8mの規模を有する。内部の四周には石積みが見られ、床面には扁平な石による石敷きが行なわれる。石の間には粘土による目張りは認められない。石積みの内法は長方形を呈し、長さ1.45m、幅0.8m、面積1.2㎡である。壁面及び床面の石は火を受けた痕跡が顕著に残る。14世紀代のものである（註19）。

ハ 八坂中遺跡土坑196

堅穴は長方形基調をなし、長さ2.2m、幅1.55m、深さ0.4mを測る。内部は四周に石積みと床面に石敷きが行なわれていたようであるが、残存状態がよくない。石積みの内法は長さ1.6m、幅1m、面積1.6㎡である。石積みと石敷きには火を受けた痕跡が顕著にみられる。14世紀前半のものである（註19）。

3

前段で紹介した竪穴建物は、柱穴の配置などから以下のように分類される。

I 類

方形や長方形など定形化した平面形を呈する竪穴で、竪穴床面に規格性をもつ柱穴配置がみられないものである。

古庄屋遺跡①～④、八坂中遺跡⑤、八坂本庄遺跡⑦、都野原田遺跡⑭、野村台遺跡⑯、中世大友府内町跡9次⑱、中世大友府内町跡13次⑲、中世大友府内町跡41次㉔がI類に相当する。これらの中には、遺構に直接伴わない可能性をもつ柱穴などがみられるものがある。仮に一部が遺構に伴うものであっても、II類にみられるような規格性をもった配置は復元できない。よって、竪穴内には建物構造に直接係わる柱穴はないものと考えられる。ただし、補助的あるいは内部の間仕切り等に係わる柱穴については存在した可能性はある。

また、古庄屋遺跡③、野村台遺跡⑯、中世大友府内町跡9次⑱には、壁に沿い全周または一部に浅い溝がみられる。これらが建物構造に主体的に係わるものか、壁面の保護等に係わるものかは定かではない。中世大友府内町跡41次？は竪穴四周の壁に石積みがなされており、明らかに壁面の保護を目的としたものであると思われる。

面積をみてみると、30㎡以上の大型のもの（古庄屋遺跡①、③）、10㎡前後のもの（八坂中遺跡⑤、八坂本庄遺跡⑦、都野原田遺跡⑭、中世大友府内町跡13次⑲）、5㎡前後のもの（野村台遺跡⑯、中世大友府内町跡9次⑱、中世大友府内町跡41次㉔）がある。傾向として、13世紀代などのものが規模が大きいことが分かる。

時代的には、出土遺物から13世紀後半～16世紀までのものが確認されている。このほか、出土遺物がなく時期の決め手に欠くが、遺跡内の状況からさらに遡る可能性を有するもの（八坂本庄⑦）もある。

II 類

建物の上屋構造を支えると想定される柱穴が床面にみられるものである。これらは、柱穴配置により1～3に分けられる。また、柱穴の掘り方については、A垂直に掘られるものとB斜めに掘られるものがみられる。

II 1 A類

竪穴の中央に柱穴をもつものである。八坂中遺跡⑥がこれに相当する。八坂中遺跡⑥については、竪穴の掘り込み部肩にも柱穴が確認されており、竪穴内の1本と併せて上屋構造を支えたものと考えられる。今回集成した25例の中で、竪穴外に上屋構造を支える柱穴が確認されたのはこの1例のみである。竪穴内に柱穴が確認されなかったI類のなかに、削平により残存していないが、このような例があった可能性も考えられる。

竪穴面積は約5㎡と小規模である。

II 2 A類

竪穴の四隅に柱穴を配するもので、柱穴は垂直に掘りこまれる。都野原田遺跡⑬、清太郎遺跡⑰がこれに相当する。

面積的には小規模で、両者とも5㎡前後以下である。

II 2 B類

竪穴の四隅に柱穴を配するもので、柱穴が外向きに斜めに掘られる。上城遺跡⑧がこれにあたる。規模的には、面積が10㎡前後である。

II 3 A類

両長辺に沿い3本以上の柱穴を配するもので、柱穴は垂直に掘りこまれる。中原遺跡⑫、上屋敷

遺跡⑮、中世大友府内町跡13次⑳、中世大友府内町跡18次西㉑、中世大友府内町跡55次㉒がこれに相当する。

規模的には面積が10～15㎡で、Ⅱ 2 類に比べるとやや規模大きいことが分かる。

時代的には、16世紀代に位置づけられる。

Ⅱ 3 B類

両長辺に沿い3本以上の端穴を配するもので、柱穴は外向きに斜めに掘りこまれる。小城原遺跡⑨、中原遺跡⑩、⑪、中世大友府内町跡75次㉓、㉔がこれに相当する。

規模的には10㎡前後である。

時代的には、15、16世紀に位置づけられる。

4

大分県下で確認されている竪穴建物の紹介と分類に基づき、いくつかの問題について検討を行なう。

・大分県下の竪穴建物出現時期について

県下の竪穴建物のうち時代的に古いものは、13世紀後半の古庄屋遺跡①～④、13世紀後半～14世紀初めの八坂中遺跡⑤、13～14世紀の上城遺跡⑧である。このほか、八坂本庄遺跡⑦は出土遺物がなく時期が不明であるが、遺跡では12世紀と14世紀の遺構・遺物が確認されており、主体となる12世紀に位置づけられる可能性をもつ。九州内の例として、福岡県の博多遺跡群では11世紀後半からの出現が確認されている（註20）。

初期の竪穴建物が検出された遺跡のうち、古庄屋遺跡は、古代以来の既存の在地勢力とは異なる勢力に係わる居館である可能性をもつ。具体的には、鎌倉幕府の成立に伴ない下向し、豊前国の支配を行った東国御家人に深く係わる勢力であることが想定される。八坂中遺跡、八坂本庄遺跡は、八坂川の下流において川に面するように立地する遺跡である。水上交通と深く係わる八坂荘の表玄関的遺跡で、物資の集積ステーション的役割を担っていたものと考えられる。出土遺物をみても、楠葉型瓦器椀、和泉型瓦器椀、吉備系土師器、京都系土師器など遠隔地より持ち込まれたものが確認されている。上城遺跡は、当地を支配した朽網氏に係わる居館と推定される。朽網氏の出自については、史料的に必ずしも明ではないが、『久住町誌』（註21）によれば、12世紀後半に大神氏系の大野氏が朽網氏を名乗ったのが起こりとされている。しかし、建久7年（1193）に反乱を起こし大友能直・古莊重吉に敗れると、領地は古莊重吉に与えられたという。朽網氏も古莊重吉の子孫が継承したと推測されている。これらのことが事実であれば、上城遺跡の居館は東国御家人と少なくとも係わるものであったことが分かる。

以上のように、大分県下における竪穴建物出現期の遺跡は、畿内や東国との係わりを強くもつ遺跡であることが分かる。資料数が少ない段階ではあるが、竪穴建物出現に畿内や東国からの影響が大きかったものと推測される。南九州の竪穴建物を検討した堂込秀人も、東国からの移入を指摘している（註22）。

・大分県における竪穴建物の変遷について

前段で述べた県下における出現期の例のうち、上城遺跡⑧のみがⅡ 2 B類で、他はⅠ 類である。よって、出現期の13、14世紀代までは、Ⅰ 類が優勢であったと言える。この段階の特徴として、竪穴面積の大きなものが目立つ点である。なかでも古庄屋遺跡①、③のように30～50㎡に及ぶものもあり、15、16世紀段階とは大きく異なる。神奈川県の大塚遺跡群では、竪穴内に柱穴がみられないものが主体を占めるようである。これらは、床面に据えられた土台角材から柱を組み上げる構造である（註23）。Ⅰ 類については、竪穴外に柱穴を配置し、これを利用し上屋構造を組み上げた可能

性もあるが、鎌倉遺跡群の例は上屋構造を考えるのに参考となるものである。一方で、大庭康時は、床面に柱穴などをもたないものについては、屋内に設けられた地下貯蔵庫の可能性を指摘している（註24）。しかし、30～50㎡に及ぶ大規模なものにあっては、単独の構造物と考えた方が良さそうである。

また、堅穴建物のみられる遺跡は、前述したように、鎌倉時代になり東国から下向した支配層に強く係わる遺跡や水上交通の拠点として畿内などと強いつながりをもつ遺跡などである。導入段階においては、限定された遺跡でみられる傾向にあるようである。

15、16世紀代になるとⅡ類が圧倒的に優勢となる。この段階では、Ⅰ類→Ⅱ1類→Ⅱ2類→Ⅱ3類と相対的に堅穴面積が増加する傾向がうかがえ、規模に応じた構造を採用していたことが推測される。この段階にいたり、導入期段階で主体を占めた土台角材から組み上げる構造から、いわゆる柱穴建ちの建物構造に主体が変化した可能性も考えられる。

この段階になると、支配階層に加え一般的な集落でもみられるようになるが、広く一般的にみられるという状況ではなく、その数は少ない。

・堅穴建物の機能について

現在、堅穴建物の機能については、半地下式の収納施設として理解される場合が多いが、皮革製品加工等の工房跡を想定する考えもある（註25）。県下の例をみると、13、14世紀の導入期では限られた遺跡でのみみられたが、15、16世紀になり一般的な集落でも散見されるようになる。しかし、その数はまだ少なく屋敷を構成する一般的建物とは言えない状況である。堅穴建物が一般的な収納施設であれば、確認される遺跡数や遺跡内での数がもっと多くなりそうである。15、16世紀においてもある程度限定された状態で構築されているとすれば、その理由として以下のような可能性が考えられる。（1）いくつかあった通常の収納施設の一形態で地域や遺跡の事情により堅穴建物採用に差が生じた、（2）単なる収納施設ではなく特定の機能に関連する施設あるいはそれに伴う収納施設、などである。（1）の場合は、堅穴建物は特定の限られた機能・性格をもたない通常収納施設のバリエーションのひとつであることから、これらを採用した遺跡と採用しない遺跡の間には性格的な差は基本的にないと考えられる。ただし、導入期においては、堅穴建物そのものが東国や畿内方面との関連から導入されたと考えられることから、それらに關係する特定の遺跡においてみられたものであろう。（2）の場合、堅穴建物は特定の機能に特化した施設であることから、堅穴建物を有する遺跡とそうでない遺跡には、遺跡の性格自体に大きな差があると考えざるをえない。堅穴構造を伴う建物を必要とする特定の機能が何であったのか、これまでの調査における遺構・遺物からは確たる根拠を見出しえない。（1）、（2）に係わる問題については、今後の資料増を待ち考えていきたい。

最後に、類似の遺構として紹介したイ～ハについて検討する。これらは、地下空間を利用した施設であるという点で堅穴建物と構造的に類似するもので、先に示した堅穴建物の分類に従えばⅠ類に相当する。しかし、堅穴建物に比べると小規模である点や、石積みや石敷きが顕著に火を受けていたり（ロ、ハ）、石の間に粘土で目張りする（イ）などの状況を考慮すると、堅穴建物と異なる機能をもつ施設であると考えられることも可能であり、現時点でその判断は難しい。仮に、イ～ハが堅穴建物と同様な機能を有する施設であった場合でも、堅穴建物が柱穴配置などからしっかりと上屋構造をもつものであるのに対し、イ～ハについては個別に上屋構造をもつものであったかは疑問である。堅穴建物はそれ自体独立した建物として認定できるもので、その機能が収納であれば収納庫あるいは収納棟と呼べるものであろう。一方、イ～ハはその規模から独立した建物であったとは考え難く、収納の機能を有するものであれば、建物というよりも貯蔵穴あるいは穴蔵と称すべきものであろう。イ～ハの位置づけについても、今後の検討課題としたい。

註

- (1) 多くの先行研究があるが、個別の紹介は割愛する。ここでは全国的な視野に立ち、その動向をまとめた近年の研究を紹介する。
- 堂込秀人「堅穴建物」『季刊考古学』第85号 2003年
- 鈴木弘太「中世「堅穴建物」の検討」『日本考古学』第21号 2006年
- (2) 大分県教育委員会『古庄屋遺跡』大分県文化財調査報告書第141輯 2002年
- (3) 大分県教育委員会「八坂中遺跡」『八坂の遺跡』大分県文化財調査報告書第150輯 2003年
- (4) 大分県教育委員会「八坂本庄遺跡」『八坂の遺跡』大分県文化財調査報告書第150輯 2003年
- (5) 久住町教育委員会『上城遺跡』2002年
- (6) 久住町教育委員会・大分県教育委員会「小城原遺跡」『小城原遺跡・中原遺跡』2002年
- (7) 久住町教育委員会・大分県教育委員会「中原遺跡」『小城原遺跡・中原遺跡』2002年
- (8) 久住町教育委員会・大分県教育委員会『都野原田遺跡』2001年
- (9) 久住町教育委員会「上屋敷遺跡」『小路遺跡・上屋敷遺跡』2000年
- (10) 大分県教育委員会『野村台遺跡』大分県文化財調査報告書第156輯 2003年
- (11) 大分県教育委員会『清太郎遺跡』大分県文化財調査報告書第115輯 2001年
- (12) 大分県教育庁埋蔵文化財センター「中世大友府内町跡第9次」『豊後府内』4
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第9集 2006年
- (13) 大分県教育庁埋蔵文化財センター「中世大友府内町跡第13次」『豊後府内』2
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第2集 2005年
- (14) 大分県教育庁埋蔵文化財センター「中世大友府内町跡第18次」『豊後府内』4
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第9集 2006年
- (15) 大分県教育庁埋蔵文化財センター「中世大友府内町跡第55次」『豊後府内』9
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第24集 2008年
- (16) 大分県教育庁埋蔵文化財センター「中世大友府内町跡第75次」『豊後府内』16（第3分冊）
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第48集 2010年
- (17) 大分県教育庁埋蔵文化財センター「中世大友府内町跡第41次」『豊後府内』16（第1分冊）
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第48集 2010年
- (18) 大分県教育委員会『利光遺跡』大分県文化財調査報告書第132輯 2002年
- (19) 註(3)に同じ
- (20) 大庭康時「博多遺跡群における考古資料の分布論的検討メモー将来の「場」の研究に向けてー」
『博多研究会誌』第5号 1997
- (21) 久住町『久住町誌』 1984
- (22) 堂込秀人「中世南九州の堅穴建物跡」『南九州城郭研究』創刊号 1999年
- (23) 鈴木弘太「中世「堅穴建物」の検討」『日本考古学』第21号 2006年
- (24) 註(20)に同じ
- (25) 註(22)に同じ